

## 巻頭の言葉

京都文教大学人間学研究所所長 越智 浩二郎

2004、5年度の二年間、私、越智は当研究所の所長を勤めさせていただきました。とにもかくにも研究所の業務が順調に進められたことを喜んでおりますが、これはひとえに研究所担当の教員のみならず、ほぼ全学の教員のご協力あつてのことでありここに心より感謝申し上げます。こういうコトバは常に誰かの退任の時に用いられる、いわば手垢にまみれた中身のないアイサツ語と見なされるのがふつうですが、私の場合は違います。

前号の巻頭の言葉の始めの部分に目をやって下さい。「その（注 越智の）リーダーシップ能力の見劣りするものであることは衆目の一致するところであります。ただ救いは、古来からの言い伝えにあるように『バカな殿様の国では将軍たちが十二分に力を発揮する』ということ……」と書きましたが、今回も全くその通りになっており、したがってアイサツ語を越えた中身のつまった感謝の言葉になっているのであります。

この雑誌の巻頭言はこれまでだとその年度に行われた、またそれから行われようとしている研究プロジェクトを紹介して全体的な展望を述べる、という形を採っています。私はそれは次期所長、西川先生を中心とした実働組にお委せることにして、ここでは私にとって愛すべきこの「人間学研究」、つまり学問の世界で「紀要もの」といわれる研究誌の在り方について日頃思ってきたことを述べさせて頂くことにしました。

紀要「もの」と言う時、人は何かそれを見下している感じがあります。事実そうです。いわゆる研究業績至上主義の研究者の間では“紀要はレフリーつきでないから研究誌としては格下

だ”“紀要は敬遠して権威ある学会誌に掲載されないと業績にならない”といったことが公然と話されていたりします。そういう考えが学問の質を落としてゆくことに気づかずにです。

ところで私にはもうひとつの愛すべき研究誌があります。「精神衛生研究」という紀要で、これは私が30年勤務した国立精神衛生研究所が出しているものです。その所員になる前から、つまり学部生、院生時代からこの雑誌は私にとってユニークな存在でした。文化人類学科や現代社会学科の先生にはおそらく想像し難いことと思いますが、当時、心理学の世界で権威あるとされた「心理学研究」や「教育心理学研究」の内容の空虚さ（ただ数量化したデータをこねまわしているだけ）につくづく愛想がついていた頃のことです。

ある研究員は自分の行ったカウンセリングの面接一回分の逐語記録を全部載せ、自分の反応のひとつひとつをいくつかのカテゴリーに当てはめ、それを行った意図、その前に示されているクライアントの気持ちに適切な反応になっているかどうか、など詳しい自己検討を行った記述的記録を論文にしてくれていました。このようなナマの臨床行為の公開は精神分析、カウンセリングの歴史を通じて画期的なことであり、カウンセリングビギナーの私たち学生にはまさに福音のようなものでした。しかしこんな型破りの論文をあの偉そうな学会誌に掲載することは絶対ありえなかったでしょう。

私が幸いこの研究誌を読むことが出来たのはそれなりのかかわりがあって自然に手に入ったからなのですが、普通、大学、短大、研究所などの紀要というものはなかなか目にとまりにくいものです。どこの図書館でも紀要というもの

は頼まないでも全国あっちからこっちから送りつけられてくるし、だいたいどれも分厚い、置き所に困る、といったことで厄介物扱いされ館内の隅っこに追いやられているのがふつうでした。

それがここ3、4年で事情が違ってきます。文献検索技術の飛躍的向上がそれをもたらしました。未開拓の領域の研究に手をつけようとする時、いくつかのキーワードを打ち込むだけで、名も知らないどこかの大学のどなたかがそれについての論文をそこの紀要に出していることがわかります。4年ほど前、臨床心理の院生が修論のテーマに「子どもにとっての迷子体験の意義」という問題を取り上げようと思い立ちました。信じられないことでしたが、この重要な心的体験について心理学者は誰一人研究を行っていない、つまり先行研究が全く見つからなかったのです（そこでその院生は大型遊園地に足を運びその迷子係のお姉さんにインタビューをすることから始めなければなりませんでした）。しかしその一年ちょっとの間に検索技術向上のおかげで、ある大学の紀要論文に関連テーマのものをを見つけることができました。

先行研究のない研究は当然手探りの研究方法で始めるしかありません。まず対象の念入りの記述から出発する。しかしそういった泥臭い質的研究は権威ある学会誌では相手にされない。そこで紀要がその受け皿になる。なんとかそこで価値ある研究が生き延びる。ただし人目につくことが非常に困難だったのですが、今や紀要に出しておけば万人の目にとまるという時代に入ったということです。

この紀要、「人間学研究」もそういう時代にあって、もちろん査読、レフリーに耐える形の整った論文を含めてゆくことは大切なことです。が、それ以外の自由な形の研究論文を育てる場として生き続けてゆくことを願っています。

#### 付記

私はここで学会誌についていささか攻撃的な言辞を弄しましたがこれは私一人の個人的感情にとどまるものではありません。教育心理学会

が発行する「教育心理学年報」に佐伯胖氏が「教育心理学をおもしろくするには」という展望論文を寄せています。題名はおだやかですが一読して実は中味は「学会誌『教育心理学研究』ハナゼオモシロクナイカ」という痛烈な批判論文であることがわかります。他領域の方にも一読をおすすめします。

佐伯胖 「展望 教育心理学をおもしろくするには」 教育心理学年報 26号pp.161-171 1986年